

ラポールマネジメントの観点から見た 「～たい」「～ほしい」疑問文選択のストラテジー —日本語母語話者の使用実態と ロシア語を母語とする学習者の学習困難点—

大政 美南

1. はじめに

親しくない人を映画に誘う場合、「映画に行きませんか」「映画でもどうですか」「この映画、面白そうじゃありませんか」など、数多くの表現で発話され得る。母語話者は文法的な正しさだけでなく、文脈における適切さ、聞き手に対して失礼ではないかなど様々なことを考慮し、1つの表現を選ぶ。しかし、日本語学習者は同様の場面で「映画に行きたいですか」と言うことが多いように思う。このような「～たい」「～ほしい」を使った疑問文（以下、「～たい」「～ほしい」疑問文と呼ぶ）で、聞き手の欲求の有無を尋ねることは、日本語において語用論的に不適切だとされている（熊井, 1989; 鈴木, 1989; 鈴木, 1997）。鈴木（1989）は「聞き手の私的領域」という考えで、なぜ「～たい」「～ほしい」疑問文が不適切かを説明し、「～たい」「～ほしい」疑問文の使用制限について述べている。「聞き手の私的領域」とは、欲求・願望などの聞き手のアイデンティティに深く関わる領域のことである。この領域に話し手が踏み込むと、特に聞き手が目上の場合には不快感を与えると考えられている。そのため、上述の「映画に行きたいですか」も聞き手の欲求という私的領域に踏み込むため、不適切だとされている。『みんなの日本語 初級 I 教え方の手引き』（2000: 148-150）でも、目上に対して「～たい」「～ほしい」を使って質問してはいけないことが指導上の留意点として挙げられている。

しかし、本当に母語話者は「映画に行きたいですか」と言って、誘わないのだろうか。筆者は、このような「～たい」「～ほしい」疑問文の発話を実際に耳にする。では、熊井（1989）や鈴木（1989, 1997）が示すように、語用論的には不適切とされている表

現をなぜ母語話者は選択するのか。筆者は、内省と事例から話し手が聞き手に対し、親しみや馬鹿にした気持ちがあり、それを伝えたいとき、「～たい」「～ほしい」疑問文を選択するのではないかという仮説を立てた。本稿では、母語話者の「～たい」「～ほしい」疑問文の使用実態を明らかにし、この仮説を検証する。その上で、こうした母語話者の表現選択の実態を学習者の語用論的指導に生かす目的で、学習者の使用実態も明らかにする。対象は、「～たい」「～ほしい」にあたる表現の“(Вы) хотите...?”、“(Ты) хочешь...?”が特別な意図なく使用されるロシア語を母語とする学習者である。そして、母語話者と学習者の表現選択の実態を比較することで、学習者の学習困難点とその要因を明らかにする。

考察に際して、Spencer-Oatey (2000) のラポールマネジメントの考えを援用する。ラポールとは調和的關係で、話し手が会話参与者間のラポールを高めたり、低めたり、維持したりなど管理することをラポールマネジメントと言う。「～たい」「～ほしい」疑問文の使用・不使用をラポールマネジメントの観点から考察することで、話し手が聞き手との関係を構築するために、いかに表現を選択するかについて論じる。

2. 先行研究

2. 1 日本語母語話者による「～たい」「～ほしい」疑問文の使用実態

日本語母語話者による「～たい」「～ほしい」疑問文の使用実態を調査した研究には、大石 (1997) と奥野 (1998) がある。

大石 (1997) では、使用実態を地域差、年代差、男女差の観点から分析している。同等の相手に対する依頼・勧誘・申し出・許可求めという発語内行為¹遂行のために、「～たい」「～ほしい」疑問文の使用が許容されるかを明らかにしようとした。調査の結果、写真を見たような聞き手に写真を見せることを申し出る「写真いっぱい撮ってきたんだけど、見たい？」という申し出の場面で許容されたのみで、その他の場面では許容度が低かった。また、この場面のように聞き手が行為に対し、積極的な願望を持っている申し出の場面では、10代で許容度が高く、20代～30代で許容度が低いという特徴も見られた。奥野 (1998) は大学生に対して適切性判断テストを行った。目上と同等の聞き手に対して依頼・申し出・勧誘・願望伺い²・許可求めの発語内行為遂行のために、「～たい」「～ほしい」疑問文が使用されることが適切か否かを調査した。

¹ オースティン (1978) が定義した言葉である。発語内行為とは、話し手が発話によって勧誘や申し出、命令などを意図する行為である。発語内行為は産出する行為である発語行為と同時に遂行される。発話されたことによって起こることや影響は発語媒介行為と呼ぶ。

² 奥野 (1998, 2001) において、願望の有無を尋ねる発語内行為を「願望伺い」と呼んでいる。本稿でもこれに準ずる。

その結果、聞き手に関係なく願望伺いのみが適切であると判断されることが分かった。

2. 2 日本語学習者による「～たい」「～ほしい」疑問文の使用実態

日本語学習者による「～たい」「～ほしい」疑問文の使用実態を調査した主な研究には、大石（1996）、奥野（1998, 2001）がある。

大石（1996）では、英語を母語とする学習者が場面ごとに「～たい」「～ほしい」疑問文の使用を許容するかアンケートによって調査した。場面は行為者が話し手か聞き手か、利益が話し手と聞き手のどちらにもたらされるか、聞き手がその行為に対して積極的な願望を持っているか否かという観点で分類し、8つの場面を設定した。その結果、次のことが分かった。「休みたい？」のように聞き手が行為者で、利益は聞き手にもたらされる場合、許容度が77%と最も高かった。次に、「そこに座ってほしい？」のように話し手が行為者で、利益は聞き手にもたらされる場合の許容度が71%と過半数を超えた。その他にも、「静かにしたい？」という行為者が聞き手で、利益は話し手にもたらされる場面を除き、全ての場面で許容度が過半数を超えた。このように、英語を母語とする学習者は、母語話者が許容しない場面でも許容することが分かる。大石は、英語では聞き手の願望や意向にあえて触れることが丁寧になるとして、このストラテジーが日本語にも適用された結果、誤用が生み出されると考察している。奥野（1998）は、2.1で述べた母語話者の使用実態の調査の際に、ニュージーランド人大学生の使用実態も明らかにしている。学習者は目上の聞き手に対しては勧誘と願望伺いのみで許容し、同等の聞き手に対しては、依頼・申し出・勧誘・願望伺い・許可求めの全ての場面で許容した。学習者が日本語母語話者よりも広範囲の発語内行為を遂行する際に、「～たい」「～ほしい」疑問文を使用できると考えていることが分かる。奥野はそのことが誤用を生み、習得を難しくする原因であると述べている。また、奥野（2001）では、ニュージーランド人大学生を対象に文完成テストを行い、母語転移以外の観点から過剰使用の原因を分析している。依頼・申し出・勧誘・願望伺い・許可求めの場面でどのように発話するか、自由記述方式で調査している。聞き手が同等でも目上でも、申し出・勧誘・願望伺いの場面において、「～たい」「～ほしい」疑問文の使用が見られた。大石（1996）と同様に、相手の願望や意向を聞くことが丁寧さにつながるという母文化と母語の影響から、学習者があえて使用している可能性を示唆している。また、奥野は母語転移以外の過剰使用の要因として、以下の点を挙げている。まず、その他の表現との区別といった文法的な混乱が生じた際に、目的を達成するために、「～たい」を使用していると考察している。さらに、「～たい」「～ほしい」を用いた文脈のない代入練習や応答練習が学習者の拡大解釈に影響を与えていると指摘している。学習者は、奥野（1998）で目上の聞き手に対しては勧誘と願望伺いのみで許容し、同等の聞き手に対しては、依頼・申し出・勧誘・願望伺い・許可求めの全

場面で許容しているのに対し、奥野（2001）では聞き手が同等でも目上でも、申し出・勧誘・願望伺いの場面において使用していた。この両研究の結果の違いはテスト方法の違いに起因すると考える。前者はどの場面で「～たい」「～ほしい」疑問文が許容されるかというメタ語用論的知識を対象に、後者はある場面で「～たい」「～ほしい」疑問文が産出されるかを対象にしているために、異なる結果が出たと考えられる。

3. 研究の枠組み

3. 1 サール（2006）の間接的言語行為論

本稿はサール（2006）の間接的言語行為論に基づいて、多肢選択式アンケートで使用実態を調査、分析した。そこで、以下ではサールの間接的言語行為論を概観する。

オースティン（1978: 10）が例示した「私は、この船を『エリザベス女王号』と命名する」のような文は、言うことによって行為が遂行される行為遂行文と呼ばれる文である。この行為遂行文の考えを基に、サールは間接的言語行為論を発展させた。間接的言語行為とは、他の発語内行為が遂行されることによって、本来の目的である発語内行為が間接的に遂行されることである。例えば、静かにしてほしいとき、A が「なんで静かにしないの？」と言うとする。このとき、質問という発語内行為を遂行することによって、本来の目的である依頼や命令の発語内行為を間接的に遂行している。サールは前者の実際に発話された質問という発語内行為を二次的な発語内行為とし、後者の本来の目的である発語内行為を一次的な発語内行為とした。A の「なんで静かにしないの？」という発話に対して、B は発話を依頼や命令と解釈し、それを受け入れ、「すみません」と答えると考えられる。また、「だって、このゲームがあまりに面白いから」のように、B は A の発話を言葉通りの理由を聞く質問と捉えて、言葉通りの回答が可能である。このように、A の発話は一次的な発語内行為において依頼や命令を意味するが、二次的な発語内行為である表現本来が持つ質問の意味も有している。そして、一次的な発語内行為と二次的な発語内行為の結びつきは、言語や文化によってある程度慣習的に決まっていると述べている。つまり、C 言語では質問で命令や依頼が達成されるからといって、D 言語では必ずしもそうではないということである。

本稿では間接的言語行為論に基づき、「～たい」「～ほしい」疑問文が質問だけでなく、勧誘や提案などの各発語内行為を遂行すると考える。そして、これらの発語内行為遂行の際に、いかに「～たい」「～ほしい」疑問文が使用されているかを明らかにすることを試みる。

3. 2 Spencer-Oatey（2000）のラポールマネジメント

言語と対人関係について論じる際、ポライトネス理論が重要な位置を占めている。Spencer-Oatey は以下の2つの点から、ポライトネス理論の不足を補うラポールマネジ

メントという考えの必要性を述べた。

まず、Spencer-Oatey はポライトネス理論の重要な概念であるフェイスについて以下の限界を指摘している。トマス（1998: 184）がフェイスとはすべての個人が持つ自分の値打ちや自分像についての感じ方だと理解されていると述べるように、Spencer-Oatey は「フェイス」が個人にのみ焦点が当てられていると指摘している。そこで、会話参与者間の調和的關係を意味するラポールという概念を重視した。この概念を用いることで、話し手と聞き手の社会的關係という、フェイスを包括したより広い範囲からコミュニケーションを捉えることができる。

次に、Spencer-Oatey はポライトネス理論が人間關係の調和に重点を置いている点に疑義を呈する。Spencer-Oatey は言語の機能には情報交換と社会的關係の管理という 2 つの競合する機能があると考えた。この社会的關係の管理をラポールマネジメントと呼ぶ。そして、良くも悪くも言葉が人間關係に絶大な影響を与え、時に話し手が人間關係を悪化させることを意図すると考える。このように、ラポールマネジメントは關係維持だけではなく、關係性を高めたり悪化させたりといった様々な会話参与者間の社会的關係の管理を含む。ラポールマネジメントという考えを用いることで、調和だけではない言葉による人間關係の調整を捉えることができる。

Spencer-Oatey（2000: 32）は話し手がとり得るラポールの方向性として、以下の 4 点を挙げている。

1. ラポール増進的方向性：対話者間の調和的關係を高めたいという欲求
例) 有利な契約を結ぶ、好意を示すなどの動機でラポールをより良くすること。
2. ラポール保持的方向性：対話者間の調和的關係を維持したいという欲求
例) 命令や批判などの言語行為による聞き手に及ぶ否定的効果を最小化すること。
3. ラポール無視的方向性：対話者間の關係の質に対する関心の欠如
例) ラポールよりも重要な事柄がある緊急事態などの場合や、謝罪など話し手がラポール維持より、自身のフェイスの保持に強い関心がある場合のように、話し手がラポールを無視すること。
4. ラポール挑戦的方向性：対話者間の調和的關係を悪化させたいという欲求
例) 他者が関わることの拒否や報復などの動機でラポールを悪化させること。

本稿でも Spencer-Oatey のラポールマネジメントの考えを援用し、表現選択ストラテジーに関しての考察を行う。ラポールマネジメントは關係の維持、増進だけでなく、悪化にも目を向けているため、この枠組みを使用することによって、話し手がいかに聞き手と社会的な關係を結びたいかという欲求と表現選択の關係の実態が見えてくると考える。

4. 研究の目的と課題

大石（1997）と奥野（1998）では、「～たい」「～ほしい」疑問文が聞き手に対して失礼ではない、一般的な使用場面を明らかにしている。つまり、規範を提示していると言える。大石（1996）と奥野（1998, 2001）では、学習者の使用に関して誤用の現れる場面と原因を明らかにしている。しかし、1. はじめにでも述べたように、母語話者は親しくない人を誘う際に「一緒に行きたいですか」と発話することもある。これらの先行研究では、一定数の母語話者による規範外の使用が観察されたが、その要因について分析していない。筆者は、話し手が聞き手に対して持つ親しみや冗談の気持ち、皮肉や馬鹿にした気持ちを伝えたい場合に、「～たい」「～ほしい」疑問文が選択されると考える。この仮説を検証し、母語話者による表現選択のストラテジーを明らかにする。そして、母語話者が持つこのような表現選択のストラテジーを学習者が学習する際の困難点を分析する。そうすることで、学習者が自身の意思に沿ったコミュニケーションができるように、語用論教育に生かすことが本稿の目的である。そこで、本稿の課題を以下のように設定する。

研究課題 1：母語話者はどのように「～たい」「～ほしい」疑問文を使用するのか。

研究課題 2：母語話者はなぜ「～たい」「～ほしい」疑問文を使用するのか。

研究課題 3：ロシア語を母語とする学習者はどのように「～たい」「～ほしい」疑問文を使用するのか。

研究課題 4：「～たい」「～ほしい」疑問文の学習上の困難点は何か。

5. 研究方法

5. 1 データ収集方法

母語話者と学習者の使用実態を明らかにするため、多肢選択式アンケートを実施した。必ずしもアンケートで選択した通りに発話するとは限らない。しかし、本稿では表現選択における心理的要因の関わりを明らかにすることが目的であるため、メタ語用論的知識を対象にする多肢選択式アンケートが妥当であると考えられる。表 1 はアンケート実施に関する概要である。

表 1 アンケート実施の概要

	母語話者を対象にした調査	学習者を対象にした調査
調査協力者	日本語母語話者	ロシア語を母語とする大学 1 年生
人数	108 人	26 人
実施期間	2017 年 6 月	2019 年 6 月
実施方法	Google forms による質問紙調査	紙媒体による質問紙調査

5. 1. 1 アンケート内容の設定

3.1 で述べたように、サールの間接的言語行為論に基づき、「～たい」「～ほしい」疑問文が質問だけでなく、勧誘や提案などの発語内行為を遂行すると考える。そして、アンケートでは場面を提示し、特定の発語内行為を遂行する際に、「～たい」「～ほしい」疑問文を使用するかどうか質問した。本稿では申し出・勧誘・提案・願望伺い・忠告の発語内行為を対象にした。大石（1996, 1997）と奥野（1998, 2001）では依頼と許可求めも対象にしているが、母語話者の許容度が同等の聞き手に対しても低かったため、本稿では調査対象としなかった。また、先行研究では調査されておらず、皮肉の気持ちが現れやすいと考えられる忠告を調査対象に加えた。勧誘と提案の違いは『新版 日本語教育辞典』（2005）を参考にした。勧誘は話し手の行為が前提であり、話し手が実行しようとしている行為、または実行中の行為に聞き手を引き込む際に使用されるが、提案は話し手の行為を前提としていないとされている。リーチ（2020）が指摘するように、発語内行為の区別は尺度的な性質であり、明確に区分されるカテゴリー的な性質ではない。3.1 に例示した「何で静かにしないの？」は依頼とも、命令とも受け取れるが、聞き手が誤って解釈した際に、話し手は自分の意図を説明することで、訂正ができる。つまり、発語内行為を区別するのは、コミュニケーション上の目的である一次的な発語内行為を遂行する話し手自身の意図と言える。

アンケートの詳細な場面は以下の 11 場面である。詳細な場面設定を表 2 に示す。アンケートでは、申し出として 3 場面、勧誘・提案・願望伺い・忠告として、それぞれ 2 場面設定した。大石（1996, 1997）、奥野（1998, 2001）では、行為者は話し手か聞き手か、受益者は話し手か聞き手かといった共通の項目を設定し、各項目を操作することで場面設定している。しかし、日本語における発語内行為ごとの成立条件が明らかになったとは言い難く、また、上述のように分類はカテゴリー的な性質のものではない。そのため、本稿では共通の成立条件で場面を設定せず、大石（1996, 1997）と奥野（1998, 2001）の調査に使用された作例、文法書（グループジャマシイ, 1998; 友松他, 2011; 松岡, 2000）、実例、内省から場面を設定した。アンケートでは、1 つの場面につき、聞き手が目上の場合と同等の場合の 2 つの設問を作成した。井出他（1986）に基づき、目上の聞き手として心的距離が最も遠い教授と上司、同等の聞き手として心的距離が最も近い恋人と親しい友人を採用した。アンケートの設問 1 では、表 2 のそれぞれの場面で「～たい」「～ほしい」疑問文を「使う」「自分は使わない」「使わないし、おかしいと思う」から選択してもらった。協力者自身が各場面で「～たい」「～ほしい」疑問文を使わないと感じた場合は、「自分は使わない」を選んでもらい、協力者自身も使用せず、他者が使用した場合にも違和感を覚える場合は「使わないし、おかしい」を選んでもらった。母語話者の回答で「使わないし、おかしい」が多い場面で、学習者が「使う」を選んだ場合に、学習者の誤用が誤解を生み、コミュニケーション上に

多大な影響を及ぼすと考えられる。

表2 アンケートの場面設定と発語内行為

発語内行為	場面設定	具体的な場面 実際の表現（同等の場合）
申し出	①話し手の負担小	荷物を持つことを申し出る。 「持ってほしい？」
	②話し手の負担大	体調不良の聞き手の代わりに働くことを申し出る。 「代わりに働いてほしい？」
	③話し手の所有物提供	携帯電話を貸すことを申し出る。 「私の使いたい？」
勧誘	④将来の行為への参加	将来の飲み会に誘う。 「〇〇（聞き手の名前）も来たい？」
	⑤実行中の行為への参加	バスで自分の隣に座るよう誘う。 「〇〇（聞き手の名前）、ここに座りたい？」
提案	⑥行為者は話し手と聞き手	休憩することを提案する。 「〇〇（聞き手の名前）、ちょっと休みたい？」
	⑦行為者は聞き手	自分の傘に入ることを提案する。 「〇〇（聞き手の名前）、バス停まで私の傘に入りたい？」
願望伺い	⑧現在の聞き手の願望の有無	喉が渴いた様子の聞き手に何か飲みたいか質問する。 「〇〇（聞き手の名前）、お茶飲みたい？」
	⑨将来の聞き手の願望の有無	噂の映画を見たい気持ちがあるか質問する。 「〇〇（聞き手の名前）、あの映画面白いらしいね。〇〇、見たい？」
忠告	⑩将来の聞き手の状態に言及	たばこをやめない聞き手に忠告する。 「〇〇（聞き手の名前）、病気になりたい？」
	⑪将来の話し手の行為に言及	屈辱的なことをする聞き手に忠告する。 「殴られたい？」

アンケートの設問 2 では、本稿の目的である話し手が聞き手に対して持つ気持ちと表現選択の関わりを調査するため、以下の質問を設定した。設問 2 では、特別な意図があれば「～たい」「～ほしい」疑問文を使用するか質問し、「使っても特別な意図はない」「冗談や親しみの気持ちがあれば使用する」「皮肉や馬鹿にする気持ちがあれば使用する」「どんな状況でも使用しない」から選択してもらった。本稿では、「冗談や親しみの気持ちがあれば使用する」「皮肉や馬鹿にする気持ちがあれば使用する」といった、聞き手に対して持つ気持ちを二次的意図と呼ぶことにする。実際のアンケートの例を以下に示す。

設問 1) 先生が重そうなかばんを持っているので、自分が持つことを申し出ます。

あなた：先生、持ってほしいですか。 先生：ええ、お願い。

1. 使う 2. 自分は使わない 3. 使わないし、おかしいと思う

設問 2) 特別な意図があれば使いますか。

1. 使っても特別な意図はない 2. 冗談や親しみの気持ちがあれば使用する

3. 皮肉や馬鹿にする気持ちがあれば使用する 4. どんな状況でも使用しない

なお、学習者に対するアンケートでは、学習者の不適切な使用の原因を探るため、下線部の表現がどのような発語内行為を遂行するために使用されているか、申し出・勧誘・提案・願望伺い・忠告から選択してもらった。

5. 2 調査協力者

表 1 の通り、調査協力者は日本語母語話者 108 名とロシア語を母語とする学習者 26 名である。母語話者は 2017 年の 6 月に Google 社の Google forms で作成したアンケートに回答してもらった。学習者はロシア在住の日本語専攻の大学 1 年生である。学期終了時の 2019 年 6 月に紙面のアンケートを行った。1. で述べたように、「～たい」「～ほしい」にあたる表現の“(Вы) хотите...?”、“(Ты) хочешь...?”が特別な意図なく使用されるため、ロシア語を母語とする学習者を対象にした。学習者のアンケートはやさしい日本語とロシア語で作成した。学習者のレベルは、初級の教科書を終えており、日本語能力試験 N5～N4 程度である。このレベルの学習者を対象にすることで、学習初期の学習者が陥りやすい誤用や、その要因を明らかにすることができ、学習初期の語用論的指導に生かすことができると考える。なお、調査を行った大学の日本語の授業は文法積み上げ式で行われており、この大学で指導する教師の話によると語用論的指導はほとんど行われていないようだ。

6. 結果と考察

6. 1 研究課題1の結果と考察

研究課題1では、日本語母語話者がどのような場面で「～たい」「～ほしい」疑問文を使用しているのか、アンケートの設問1の結果を基に述べる。

目上の聞き手に対する使用度を図1に示す。目上の聞き手に対しては、当該行為を将来行う願望があるかを聞く⑨「あの映画面白いらしいですね。ご覧になりたいですか」のみ、57%で過半数が使用すると答えた。この発話が許容されることについて、熊井（1989）は次のように説明する。願望伺い⑨のような話し手と聞き手の利害に関係のない話題では、「～たい」「～ほしい」疑問文使用の許容度が上がるとする。また、忠告⑩「病気になりたいですか」と忠告⑪「殴られたいですか」は聞き手のフェイスを侵害する恐れがあるが、⑩20%、⑪12%が使用すると回答した。これら忠告の場面でどのような二次的意図に基づき表現が選択されたかは、課題2で分析する。その他の発語内行為を遂行する際には、使用しないという回答が90%を超えた。

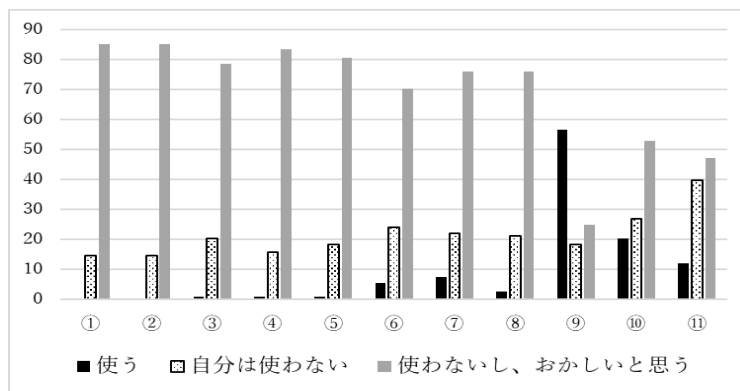


図1 目上に対する使用度 (%)

同等の聞き手に対する使用度を図2に示す。勧誘④「(飲み会に誘う) 来たい?」、提案⑥「ちょっと休みたい?」、願望伺い⑧「お茶飲みたい?」、願望伺い⑨「あの映画面白いらしいね。見たい?」、忠告⑩「病気になりたい?」、忠告⑪「殴られたい?」で40%以上が使用すると回答した。最も多いのは目上の聞き手の場合と同様で、願望伺い⑨の81%であった。休憩することを提案する⑥は65%、聞き手の現在の願望の有無を聞く⑧は69%と使用する人が過半数を超えた。願望伺い⑧は聞き手の私的領域に関わる質問だが、相手のごく親しい友人や恋人である場合には許されるという、鈴木（1989）の考えと一致する。同じ発語内行為間でも、勧誘④「(飲み会に誘う) 来たい?」と勧誘⑤「(バスで) ここに座りたい?」、提案⑥「ちょっと休みたい?」と提案⑦「バス停まで私の傘に入りたい?」の間には使用度に差がある。使用度が低い勧誘⑤と提案⑦は行為者が聞き手で、発話直後に行われる行為に言及しているのに対し、使用度

が高い勧誘④と提案⑥は行為をするのが話し手と聞き手双方で、行為までの時間は不明である。行為者に話し手が含まれることと発話から行為までの時間差が許容度に影響を与える可能性がある。研究課題1では、日本語母語話者は聞き手が目上であっても、忠告などの場面で「～たい」「～ほしい」疑問文を使用するという回答が見られた。このように、通常は規範外と考えられる発話が為される理由を研究課題2で分析する。

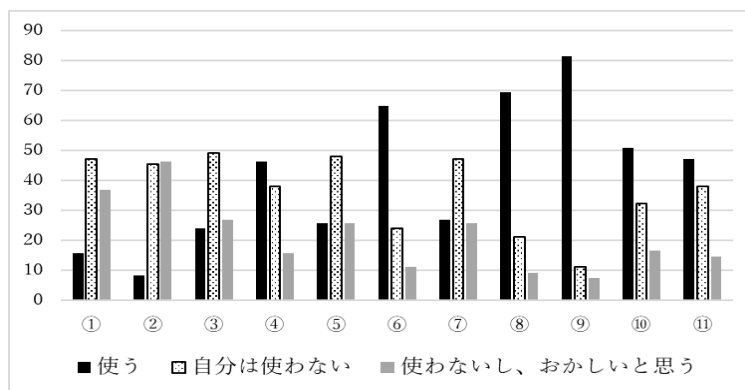


図2 同等に対する使用度 (%)

6. 2 研究課題2の結果と考察

研究課題2では、母語話者の二次的意図が「～たい」「～ほしい」疑問文の選択に影響を与えるのか、アンケートの設定2の結果を基に述べる。アンケートでは、特別な意図があれば「～たい」「～ほしい」疑問文を使用するか質問し、「使っても特別な意図はない」「冗談や親しみの気持ちがあれば使用する」「皮肉や馬鹿にする気持ちがあれば使用する」「どんな状況でも使用しない」から選択してもらった。

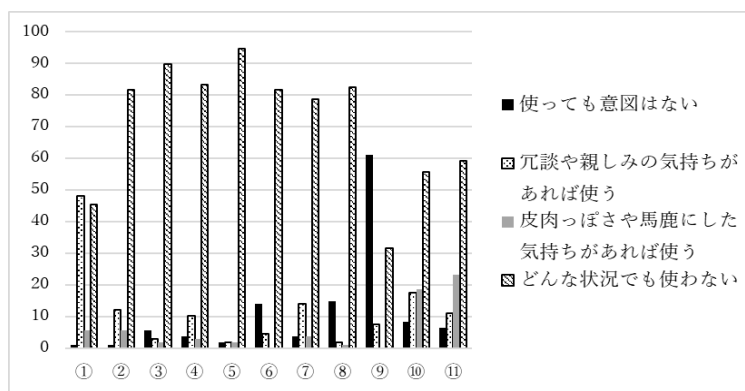


図3 目上に対する二次的意図に基づく使用度 (%)

目上の聞き手に対する結果から考察していく。結果を図3に示す。申し出①「(かばんを) 持ってほしいですか」は48%の回答者が冗談や親しみの気持ちがあるときに使

用している。忠告⑩「病気になりたいですか」は、45%が使用する（「使っても特別な意図はない」「冗談や親しみの気持ちがあれば使用する」「皮肉や馬鹿にする気持ちがあれば使用する」の合計）と回答し、全体の18%が冗談や親しみの気持ち、全体の19%が皮肉や馬鹿にした気持ちがあれば使用している。忠告⑪「殴られたいですか」は41%が使用すると回答し、全体の11%が冗談や親しみの気持ち、全体の23%が皮肉や馬鹿にした気持ちがあれば使用すると回答した。以上のことから、聞き手が目上であっても、二次的意図を伝達したい場合に、「～たい」「～ほしい」疑問文が選ばれるということが明らかになった。

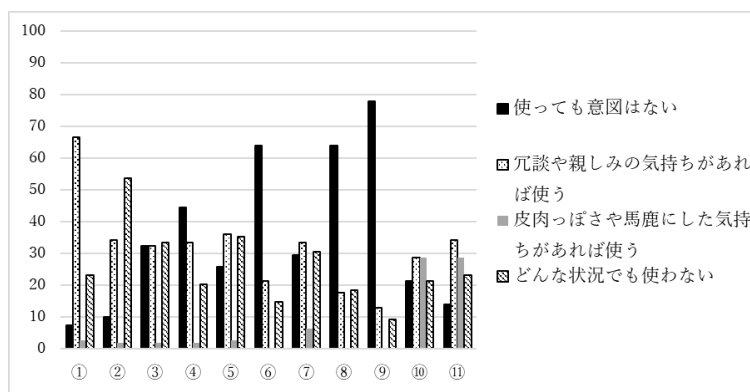


図4 同等に対する二次的意図に基づく使用度 (%)

同等の聞き手に対する結果を図4に示す。同等に対しては、二次的意図を伝達する場合に、あえて「～たい」「～ほしい」疑問文を選択するという戦略がより顕著に現れた。研究課題1で許容度が高かった勧誘④「(飲み会に誘う)来たい?」、提案⑥「ちょっと休みたい?」、願望伺い⑧「お茶飲みたい?」、願望伺い⑨「あの映画面白いらしいね。見たい?」は、二次的意図なく使用されている。3.1で述べた一次的な発語内行為と二次的な発語内行為は慣習的な結びつきがあるというサールの考えを踏まえると、慣習的な結びつきの場面では二次的意図が創出されにくいことが分かる。申し出①「(かばんを)持ってほしい?」、申し出②「代わりに働いてほしい?」、申し出③「私の(携帯電話を)使いたい?」、勧誘⑤「(バスで)ここに座りたい?」、提案⑦「バス停まで私の傘に入りたい?」では、冗談や親しみの気持ちがある際に、使用される傾向が見られた。この特徴は特に申し出①で顕著で、「使っても特別な意図はない」「冗談や親しみの気持ちがあれば使用する」「皮肉や馬鹿にする気持ちがあれば使用する」を合わせると、77%が使用すると回答した。内訳をみると、全体の67%が冗談や親しみの気持ちで使用している。

忠告の場合は皮肉や馬鹿にした気持ちで使用するという回答が多く見られた。忠告では図5に示すように年代間の差が現れた。20代は皮肉や馬鹿にした気持ちで使用す

る傾向が強く現れる一方で、50代と60代は冗談や親しみの気持で使用する傾向が強く見られた。年代によって社会での経験、立場、権利が変化することによって「～たい」「～ほしい」疑問文を使用する動機が異なってくると推察される。また、皮肉や馬鹿にした気持ちを伝えるために「～たい」「～ほしい」疑問文が使用されるのは、新しい用法として母語話者に受け入れられ始めている可能性もある。

これまで述べたように、使用を避けるべきと考えられる規範外の場面で、「～たい」「～ほしい」疑問文を使用することは、母語話者が聞き手に対して気持ちを伝えるストラテジーだと言えることができる。

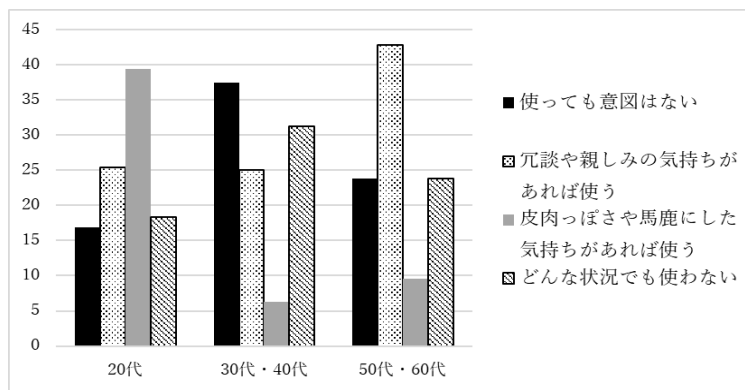


図5 忠告⑩における二次的意図に基づく使用度の年代差 (%)

6. 3 研究課題3の結果と考察

研究課題3では、ロシア語を母語とする学習者はどの場面で、どのような二次的意図で「～たい」「～ほしい」疑問文を使用するのか、アンケートの結果を基に述べる。

学習者は二次的意図の伝達を考慮しない場合、聞き手が目上か同等かによって使用するか否かが大きく分かれる結果となった。ロシア語はその他のヨーロッパ言語と同じく、二人称が2種類ある。相手が心理的に近い場合は二人称単数である ты を用い、そうでない場合は二人称複数である вы を選ぶ。また、アンケートを開始する前に「目上の人には「～たい?」「～ほしい?」は失礼だから使えないでしょ?そう習いましたよ」という反応があったことから、学習者は「～たい」「～ほしい」疑問文の使用に関して、教科書の文法説明や教師の指導の結果、聞き手の立場を考慮し、聞き手が目上である場合に質問することは失礼だと考えていることが分かる。それでも、図6に示す通り、日本語母語話者よりも使用するという回答が多く、特に願望伺い⑧「お茶、召し上がりたいですか」は73%が使用すると答えた。母語話者は、使用するという回答が2.8%で、「使わないし、おかしいと思う」という回答が70%を超えたことから、学習者の不適切な使用は誤解を与える恐れがある。この他に申し出③「私の(携帯電話を)お使いになりたいですか」、勧誘④「(飲み会に誘う)いらっしゃりたいで

すか」、勧誘⑤「こちらにお座りになりたいですか」の場面では、過半数が使用すると回答した。提案⑦「バス停まで私の傘に入りたいですか」は40%が使用すると答え、過半数には達しなかった。このことから、聞き手が目上であっても、ロシア語を母語とする学習者は申し出③、勧誘④⑤、願望伺い⑧のような場面と「～たい」「～ほしい」疑問文を結びつけていると言える。

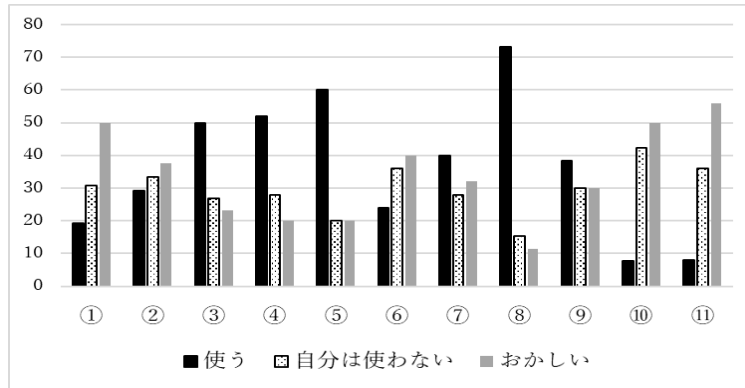


図6 学習者の目上に対する使用度 (%)

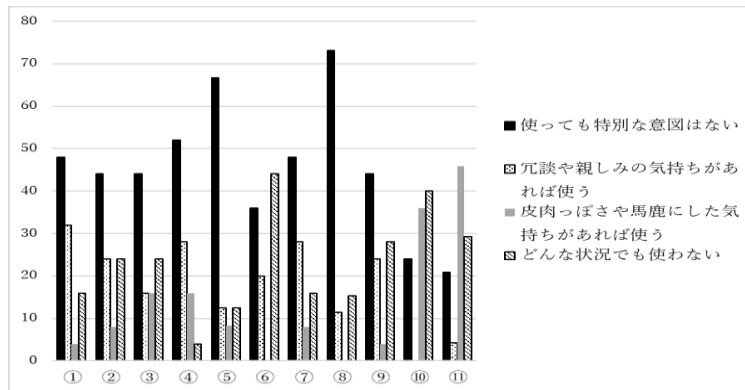


図7 学習者の目上に対する二次的意図に基づく使用度 (%)

二次的意図を伝える目的でいかに使用されているのか分析したところ、図7に示す通り、忠告を除き、全場面で二次的意図なく使うという回答が多くを占めた。ロシア語では願望を聞く際に、英語の“want”に相当する“хотеть”を用いて、“(Вы) хотите...?” ((あなたは) …たいですか) ”が使用される。ロシア語の使用法に関しては、ロシア語母語話者である日本語教師に意見を聞いた。すると、この表現は目上に対しても特別な含意なく使用されると話した。一方で、忠告⑩「病気になりたいですか」と忠告⑪「殴られたいですか」は皮肉や馬鹿にした気持ちで使用される傾向が見られた。この傾向は同等の聞き手に対する結果(図9)にも見られた。ロシア語では“(Вы) хотите...?”、“(Ты) хочешь...?” ((君は) …たい?) ”が忠告の場面でよく使用され、

皮肉や怒りを表すとロシア語母語話者は説明する。これらのことから、二次的意図を伝達する機能と表現の対応にも母語の影響が見られる。なお、図6と図7を比較すると、二次的意図を伝達する場合は使用するという回答がかなりの割合で増加している。回答者が仮に使用されるなら、どのような目的かという視点で回答したためだと推測される。

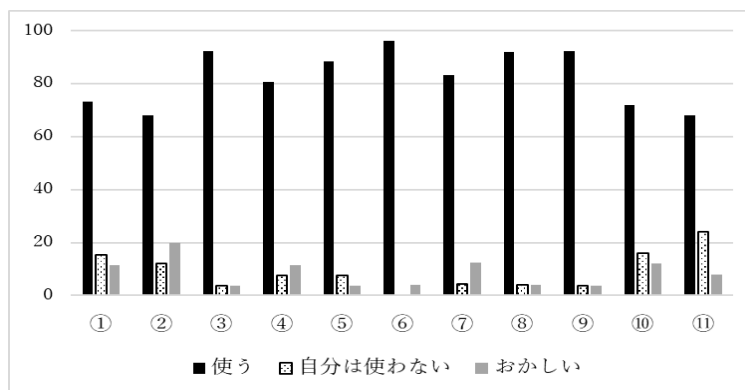


図8 学習者の同等に対する使用度 (%)

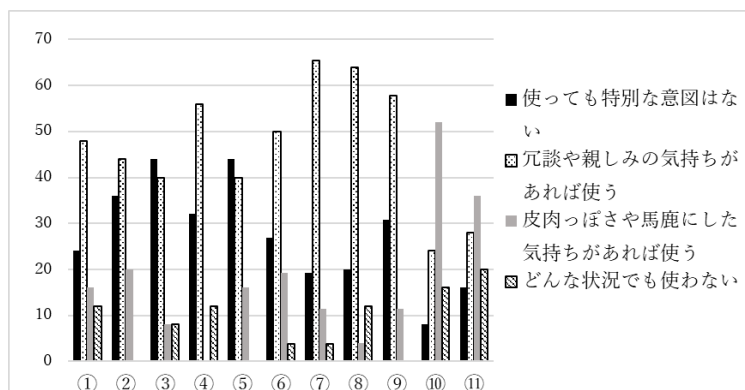


図9 学習者の同等に対する二次的意図に基づく使用度 (%)

同等の聞き手に対しては、全ての場面で使用するという回答が過半数を超えた (図8)。また、図9に示す通り、忠告を除き、全場面で冗談や親しみの気持ちでの使用が40%を超える。目上の聞き手に対してはこのような傾向が見られなかったことから、学習者の中で「～たい」「～ほしい」疑問文は、同等の聞き手と近しい関係を築きたい場合に使われていると言えるだろう。ロシア語母語話者は“(Ты) хочешь...?”に特別な含意はないと話すため、母語の影響以外の要因が考えられる。学習者の持つ語用論的な基準は、母語と目標言語など様々な要因が絡み合って形成されていると推察する。

6. 4 研究課題4の結果と考察

研究課題4では研究課題3の結果を踏まえながら、表現選択ストラテジーの学習上の困難点について論じる。

研究課題3で示されたように、ロシア語を母語とする学習者は同等の聞き手に対して全場面で使用するという回答が多く、その目的は忠告を除き、冗談や親しみの気持ちを伝達することであった。アンケートでは、各場面においてどのような発語内行為を意図して「～たい」「～ほしい」疑問文が使用されているのか質問した。すると、図10のような結果が出た。学習者は勧誘・提案・願望伺い・忠告という発語内行為の遂行のために使用すると考えている。ロシア語母語話者に聞くと、ロシア語の“(Вы) хотите...?”、“(Ты) хочешь...?”は願望伺いだけでなく、先述した忠告でも使用され、更に勧誘、提案をする場合にもよく使われると話す。本稿で調査したロシア語を母語とする学習者は、発語内行為と表現の対応において母語の影響が見られる。

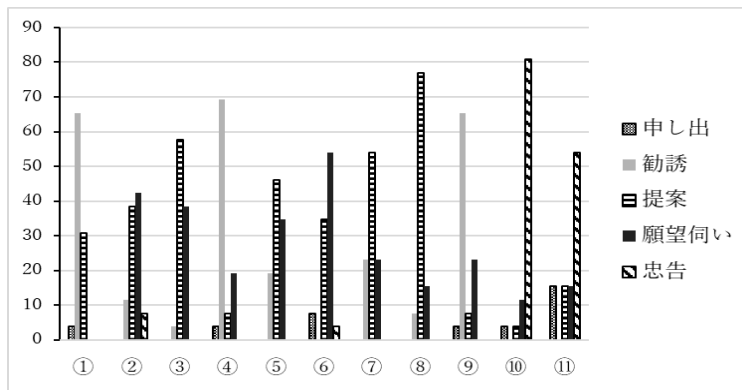


図10 各場面における学習者の意図する発語内行為

学習上の困難は二次的意図と表現選択の関係にも見られる。ロシア語を母語とする学習者は目上の聞き手に対しては二次的意図なく使用する傾向が見られる一方で、同等の聞き手に対しては親しみや冗談の気持ちで使用する傾向が強く見られた。この点にも学習者独自の基準が現れている。つまり、学習者の語用論的能力の習得を考えた場合、次の2点の困難点が見えてくる。母語と目標言語の1) 発語内行為と表現の非対応、2) 表現と二次的意図を伝達する機能の非対応の2点である。1) が原因で、意図した発語内行為が遂行されないという結果になる。また、2) が原因で、意図せず、学習者の発話が馴れ馴れしいと受け取られたり、皮肉と受け取られたりしてしまう可能性がある。このことから、学習者の語用論的に不適切な発話の原因や語用論的知識の指導を考える際には、1) だけでなく2) にも考慮する必要があると考える。

7. まとめと総合的な考察

本稿では、日本語母語話者による規範外の「～たい」「～ほしい」疑問文の使用目的は、聞き手に対しての気持ち（二次的意図）を伝達することであるという仮説を立て、検証を試みた。また、学習者はそのようなストラテジーに基づいた母語話者の表現選択を理解しているのか、学習困難点は何かを明らかにしようとした。

2.1 で述べたように、大石（1997）と奥野（1998）は母語話者の使用実態を調査したが、規範外と思われる場面でも一定数の母語話者は「～たい」「～ほしい」疑問文の使用を許容している。本稿の研究課題 1 と 2 では、このような母語話者による規範外の発話の目的は、冗談や親しみの気持ち、皮肉や馬鹿にした気持ちといった二次的意図を聞き手に伝達することであることが分かった。母語話者は「～たい」「～ほしい」疑問文に関しては、図 11 のような流れで表現を選択していると考えられる。

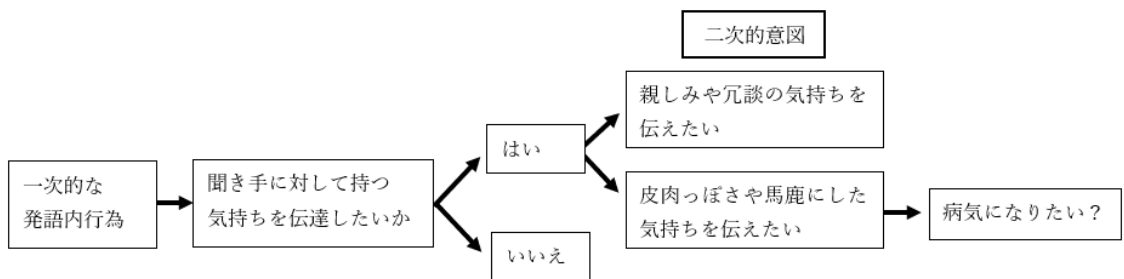


図 1 1 母語話者による表現選択の流れ

ここで、3.2 で述べた Spencer-Oatey（2000）のラポールマネジメントの考えを援用し、母語話者の表現選択について考察したい。ラポールマネジメントとは、話し手のストラテジー選択を決定する要因の 1 つで、話し手の意図に応じて、聞き手との関係性を管理することである。久保（2005）は、遠慮という言語行為をしないことで、ヨソサマ³関係からミウチ関係に移行すると指摘している。また、ミウチ関係の聞き手に遠慮することが皮肉やからかいになると述べている。つまり、遠慮という言語行為がラポールを増進させたり、ラポールを悪化させたりしている。このことから、話し手の表現選択が話し手と聞き手の間の変え得るということが分かる。以上のことを「～たい」「～ほしい」疑問文の使用に置き換えて考える。話し手が親しみや冗談の気持ちを伝達することで、会話参加者間のラポールは増進されたり、維持されたりすると考えられる。よって、母語話者が規範外の場面で「～たい」「～ほしい」疑問文を選択することで、聞き手との関係を調整しようとしていると捉えることができる。例え

³ 久保（2005）が定義した人間関係の区分。ミウチ、ヨソサマ、ヨソモノに分類される。ヨソサマとは遠慮すべき関係である。一方で、ヨソモノは対人的配慮をしなくてもいい関係である。

ば、申し出などの場面で冗談や親しみの気持ちで「～たい」「～ほしい」疑問文を使用することは、申し出が聞き手に利益を与える行為であるため、ラポールを増進する目的であると言える。一方で、忠告は聞き手に利益を与える行為とは言い難く、聞き手のフェイスを脅かす行為である。このような場面では、ラポールを維持する目的のために、冗談や親しみの気持ちを伝える「～たい」「～ほしい」疑問文を使用すると考えられる。つまり、「～たい」「～ほしい」疑問文の規範外の使用はラポールマネジメントのためのストラテジーだと考えることができる。しかし、皮肉や馬鹿にした気持ちを伝えることは、聞き手とのラポールを増進することにも、ラポールに挑戦することにもつながると言える。馬鹿にした気持ちを持つということは、聞き手を卑下しているということである。このような二次的意図を伝達する目的で、「～たい」「～ほしい」疑問文を選ぶと考えるならば、ラポールを悪化させるために使用すると結論付けることができる。皮肉に関しては、ラポール増進や維持、悪化のどれが目的であるかは結論付けることはできない。そのため、今後はこの点を明確にする必要がある。

また、「～たい」「～ほしい」疑問文が持つ特性もこの表現がラポールマネジメントの目的で使用される理由の1つであると考えられる。鈴木(1989)の「聞き手の私的領域」では、「～たい」「～ほしい」疑問文が聞き手のテリトリーに入るため、目上に対しては不適切であると述べている。「～たい」「～ほしい」疑問文には聞き手との距離を詰める機能があると考えられ、相手に心理的に近づく場合にも、必要以上に踏み込み失礼な態度をとることで関係を悪化させる場合にも使用されると言えるだろう。

研究課題3と4から、ロシア語を母語とする学習者の使用実態とその要因が明らかになり、学習者には1) 発語内行為と表現の対応、2) 表現と二次的意図を伝達する機能の対応という2つの学習上の困難点があることが分かった。1) として、母語の影響で、「～たい」「～ほしい」疑問文と勧誘、提案、忠告とを強く結びつけていることがわかった。2) として、同等の聞き手に対しては忠告の場面を除き、冗談や親しみの気持ちで使用する傾向が見られた。この使用法はロシア語には見られず、日本語母語話者の規範とも異なっており、学習者独自の使用法と言える。この他にも、学習者は目上の聞き手と同等の聞き手に対する表現を明確に区別し選択していることが分かった。これは目上とそれ以外が区別されている母語のロシア語の影響と、目上には「～たい」「～ほしい」疑問文を使って質問してはいけないという日本語指導の影響と考えられる。

以上のことから、表現と二次的意図の関係を検討する場合、発語内行為と表現が慣習的な結びつきをしているかが重要になる。母語話者はその基準を利用し、気持ちを伝達する機能を生み出していると言える。ロシア語を母語とする学習者は表現と発語内行為の対応についても、表現と二次的意図の対応についても、「～たい」「～ほしい」疑問文の不適切な使用が見られた。前者の非対応における不適切な発話によって、話

し手の発語内行為のゴールが達成されない可能性がある。後者の非対応における不適切な発話によって、人のテリトリーに無遠慮に入ってくると思われたり、冷たい人と捉えられたりする危険性がある。しかし、学習者が言葉によって聞き手と関係を構築していきたいと思うならば、表現と二次的意図の対応を知り、効果的に使うことが必要だろう。

上述のように学習者が聞き手への気持ちを積極的に伝え、関係を能動的に構築するために、表現と発語内行為の対応だけでなく、表現と二次的意図の対応も指導すべきである。このことが、母語話者に発話の解釈を委ねるのではなく、学習者自身の意思に沿ったコミュニケーションを行うことにつながると考える。指導する際には以下の点が重要である。まず、学習者は母語の語用論的側面に意識的になる必要がある。そうすることで母語での基準や慣習的な発語内行為と表現の結びつきを目標言語と比較することができる。次に、目標言語における発語内行為と表現の慣習的な結びつきを学ぶことになるだろう。最後に規範外の使用、表現と二次的意図の対応、聞き手との関係を築くという動機に従い表現を選択することを意識的に学ぶ必要があると思われる。例えば、母語話者の表現選択を分析することや、母語話者に表現選択についてフィードバックをもらうことが有効ではないかと考える。その際にも母語における表現と二次的意図の対応を認識することが必要になるだろう。

8. 今後の課題

本稿での調査、分析を通して、次の2点の課題が残った。本稿では学習者は大学1年生で、日本語のレベルは日本語能力試験N5～N4相当であった。学習上の困難点をより明確にし、習得過程を検討するためには、より高い日本語レベルの学習者の使用実態も調査する必要があると考える。また、学習者の不適切な使用の原因は、ただ過剰使用しているだけとは言い切れない、日本語の規則ともロシア語の規則とも言えない、学習者独自の判断基準が見られた。学習者がどのような基準に基づいて判断しているのかをインタビューなどによって調査する必要がある。

〈付記〉

本稿の一部は、筆者が2016年4月から2018年3月の横浜国立大学大学院在学中に執筆した修士論文の一部をまとめたものです。そして、修士論文執筆に際しては、指導教員である橋本ゆかり先生にあたたかいご指導と激励をいただきました。この場を借りて、心よりお礼申し上げます。

〈参考文献〉

- 井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂
- 大石久美子（1996）『～（し）たいですか？』に代表される願望伺いについて『日本語教育』, 91, 13-24.
- 大石久美子（1997）「日本語の願望疑問文の使用制約—『～したい？』『～してほしい？』を中心とするアンケート調査をもとに—」『日本語と日本語教育』, 26, 13-36.
- オースティン, J. L.（1978）坂本百大（訳）『言語と行為—How to Do Things with Words—』勁草書房
- 奥野由紀子（1998）「日本語願望疑問文の習得に関する研究—願望疑問文適切性判断調査に基づいて—」『教育学研究紀要』, 44, 398-403.
- 奥野由紀子（2001）「英語母語話者の願望疑問文使用の要因とその指導に関する一考察—『言語転移』以外の観点を含めて—」『日本語・日本文化研究』, 8, 18-30.
- 久保進（2005）「言語行為から見たラポールマネジメント：『遠慮』という言語行為」『松山大学論集』, 17, 2, 61-191.
- 熊井浩子（1989）「待遇表現の一視点—『ほしい・たい』を中心に—」『日本語学校論集』, 16, 1-14.
- グループジャマシイ（編）（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- サール, J. R.（2006）山田友幸（監訳）『表現と意味—言語行為論研究—』誠信書房
- 鈴木睦（1989）「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧さは如何にして成り立つか—」『日本語学』, 8, 2, 58-67.
- 鈴木睦（1997）「日本語教育における丁寧体世界と普通世界」田窪正則（編）『視点と言語行動』くろしお出版, 45-76.
- スリーエーネットワーク（編）（2000）『みんなの日本語初級 I 教え方の手引き』スリーエーネットワーク
- トマス, ジェニー（1998）浅羽亮一（監修）『語用論入門 話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』研究社出版
- 友松悦子・宮本淳・和栗雅子（2011）『新装版 どんときどう使う日本語表現文型辞典』アールク
- 日本語教育学会（編）（2005）『新版 日本語教育辞典』大修館書店
- 松岡弘（監修）（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- リーチ, ジェフリー（2020）田中典子（監訳）『ポライトネスの語用論』研究社出版
- Spencer-Oatey, H.（2000）*Culturally Speaking: Culture, Communication and Politeness Theory*, Bloomsbury Academic.